

保育者養成課程における実践的な学びと総合的な理解を目指して- [こどもの国] の取り組みから -

著者	清水 桂子, 橋本 卓三, 高橋 さおり
雑誌名	北翔大学短期大学部研究紀要
巻	53
ページ	79-87
発行年	2015
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00001273/

保育者養成課程における実践的な学びと総合的な理解を目指して —— [こどもの国] の取り組みから ——

Aiming for practical learning and the comprehensive understanding
of a child care provider's work through the training curriculum
— From an initiative of “Kodomo no kuni” —

清 水 桂 子 橋 本 卓 三 高 橋 さ お り
Katsurako SHIMIZU Takuzo HASHIMOTO Saori TAKAHASHI

I は じ め に

本研究は、保育者養成課程における行事での実践を通し、学生の学びの総合的な理解の向上を目指した取り組みの過程を示すものである。さらに、行事の実践の様子や振り返りから取り組みの過程について考察し、その有効性や今後の課題について検討する。

北翔大学短期大学部こども学科（以下こども学科）は、2年間の課程において保育者・教育者を養成する学科である。こども学科の教育理念にも掲げているように、優れた実践力を有する人材を育成することを目指し、教育目標は、「こどもの保育や教育及びこどもに関する諸課題に適切に対処できる技術や実践力を身につけた人間性豊かな人材の育成」としている。ほとんどの学生が保育・教育に関わる資格・免許を取得し、専門職に就いている。近年では、平成23年度保育士養成課程の科目の改正や保育の動向に応じ、教育課程の編成について検討し続けてきた。さらに、保育者のより高い専門性が求められる中、養成段階においてもそれに応えるべく、学びの環境、施設整備も見直され、保育・教育の演習科目に機能的な教室が完成した。同時期、平成26年度入学生よりコース制度を設け、保育コース・音楽コース・教育コースの3コースを設置した。3コースともに感性と人間性を豊かにする学びや、実践的・体験的な学修を重視し、従来の学びの課程に加え、各コースの特色を生かした教育課程の編成、見直しを図ってきた。こども学科では、2年間の学びの段階を、「入門」、「専門基礎」、「専門応用」、「充実発展」と4段階に分け、2年間の課程の中において学生が学びを積み上げ、総合的な理解と実践力を身につけていく教育課程の編成と授業展開について工夫を図ってきた。

上述の経緯を背景とした中で、こども学科の特色ある活動のひとつに、大学行事である大学祭の企画として、こども学科の運営する [こどもの国] がある。これは、こども学科で代々受け継がれてきている取り組みのひとつである。これまでも工夫・改善が重ねられ、少しずつ形を変えながら、取り組みは継続されてきた。学生にとっては、貴重な体験と学びが凝縮されて

いる場であることは言うまでもない。筆者ら（平成26年度〔こどもの国〕担当者3名）は、さらなる総合的な学びと実践力の向上につながる可能性を模索し、企画・運営・内容等について再検討を試みた。そこには、今年度から導入したコース制の特色を活かした学びを存分に活かせること、また、入門期にあたる、専門的な学びをスタートさせたばかりの1年生が最大限に力を発揮できる場であることが重要と考えた。さらに、それを可能とするため、取り組み内容と普段の学びが連動できるよう、可能な範囲内の科目間の連携を図ることも意識した。以上のことをふまえ、〔こどもの国〕の取り組みを整理し、今後の可能性について検証する。

Ⅱ 研究の目的と方法

本研究は、毎年8月上旬におこなわれる大学祭企画〔こどもの国〕の企画・準備・運営と同時期の授業の学びを連動させながら、学生が自身の学びを総合的に理解することができるよう目指したものである。〔こどもの国〕はこども学科1年生が担当し、教室にさまざまな遊びのコーナーを作り、地域の親子を招くもので、学生の構成した環境や考案したさまざまな遊びを、来学した地域の親子が自由に楽しむ場である。例年、多くの来場者があり、実習を経験する前の学生にとっては、子どもとかかわる貴重な学びの場となる。

そこで今年度は、準備・計画・運営の、これまでの取り組みを基盤としつつ、過程や役割分担等を整理することを試みた。1年前学期の学生が、入学して数ヶ月間の学びを活かしつつ実際に子どもとかかわり、実践の場として成り立つような枠組みの工夫を探ることが重要であると考えた。さらに各コースの学びの特色を活かしつつ、いかにして学生が主体的かつ一人ひとりが責任感をもって運営できるのかを目指し、役割分担および実際の企画・準備・運営の工夫について検討した。

Ⅲ 行事〔こどもの国〕取り組みの枠組みと展開方法

3-1 取り組みの枠組み

取り組みの主体となるのは、こども学科1年生（全学生127名）である。本学年は6クラスで、音楽コース1クラス、保育コース4クラス、教育コース1クラスで編成されている。期間は、企画・準備・当日の運営・振り返りまでを含み、平成26年6月10日（火）～8月3日（日）で実施した。うち、準備、練習、打ち合わせの時間は最大10コマ確保し、その他、前日のリハーサル・会場設営と当日の運営、および振り返りをおこなった。場所は、本学内においておこなわれ、当日の主な会場は、26年3月末に完成した新2号棟である。今年度の取り組みの枠組みは、以下の4点に配慮することを明確にした。ひとつめに、対象学生（こども学科1年生）全員が共通のイメージをもち、主体的に取り組めるようにすることである。ふたつめには、学生が主体的に運営できるための役割分担を明確にすることである。これらは、全員が行事の全体像を把握するとともに、クラスの役割、個々の役割を責任をもって担うことのできる仕掛けづくりが必要であると考えた。次に、各コースの特色を活かせる取り組みとすることである。プロ

プログラムの編成の際、コースの特色を活かし、発揮できるような内容や取り組みにしようと考えたものである。最後に、遊びの考案、環境構成、子ども理解等を同時期の授業での学びと関連づけて学生が理解できるよう工夫した。これらは行事が通常の授業とかけ離れたものとしてあるのではなく、学びと連動していることに学生自身が気づきながら取り組むことと、総合的な理解につながるような工夫をする必要があるためである。これらの4点については、以下で詳細を述べる。

3-2 学生主体の取り組みと連携を目指した役割分担

本取り組みは、毎年、実行委員会を設置している。今年は、実行委員を各クラスから2名ずつ選出し、全6クラス計12名の委員と、担当教員3名で構成した。委員のうち委員長1名、副委員長2名を選出した。実行委員会では、こども学科の伝統的な取り組みである「こどもの国」の全体像を把握・理解し、おおまかなプログラム編成、コース別・クラス別の役割分担等をおこなった。全体連絡や進捗状況については、都度全学生へ周知するようにし、適宜実行委員会を開催しながら、生じた課題等は協議・調整の上、すばやい問題解決に努めた。担当の教員は、適宜助言をする形でかかわることとし、共通理解を図るべく全学生への周知や連絡は、委員から各クラス全体へ伝達する流れを徹底した。

3-3 コースの特色を生かした役割分担

次に、各コースの取り組みについて述べる。保育コースと教育コースは、遊びのコーナーを設置し、音楽コースは音楽コンサートを実施した。保育コースと教育コースは各クラスにおいて2種類の遊びを担当した。ひとつめは、「遊びの広場」とし、あらかじめ学生が作る手作り遊具などを設置し、学生の考案した遊び方やルールをもって展開するものである。具体的には、宝探しや的あてゲームなどを設置した。ふたつめは、「作り物の広場」とし、折り紙や紙コップなどの身近な素材を用い、各コーナーにて学生が子どもに個別対応し、製作遊びができるようにするものである。さらに、製作した作品を用いてどのように楽しむかについても学生が考案する。また、「遊びの広場」では、保育コースと教育コースの各クラスから2名ずつ選出し、計10名の学生によるパネルシアターの発表の場を設けた。音楽コースは、親子向けのコンサート「どれみふぁコンサート」をおこなった。主なプログラムはオペレッタ、歌、器楽合奏などである。1日2回公演とし、1回の公演時間は45分程度とした。一部、参加型のプログラムもあり、学生の発表を披露するだけでなく親子と一緒に楽しめる構成にした。その他、会場装飾や衣装などにも、親子を迎え入れるにふさわしい創意工夫をおこなった。

3-4 科目間の連携

〔こどもの国〕は行事の位置づけであるが、3-1でも述べたように、遊びの考案、環境構成、子ども理解等が授業における学びと連動していることに学生が気づきながら取り組むこと、また、総合的な理解につながるような工夫をする必要があると考える。つまり、学生がこれまでの授業での学びと行事の取り組みを関連づけて理解できるような仕掛けが必要となる。専門的知識と技術を身につけようと学びをスタートしたばかりの学生にとって、実際に子どもとかわる機会が大変貴重なものとなることは言うまでもない。学生が、これまでの学びと実践をどのように結びつけていくのかは大変興味深く、学生の可能性に働きかける最大の機会といえよう。したがって、前学期にこれまでの保育・教育に関する学びが最大限活かされ、かつ総合的な理解の仕方ができるよう、関連科目の一部とも連携して取り組むこととした。具体的には、こどもの国担当者教員が担当する「基礎教育セミナーⅠ」「保育原理」、「保育者論」、「保育内容人間関係」、「音楽表現」、「保育内容演習Ⅰ」である。担当者が、各科目から取り組みの視点を示し、学生がそれらを意識しながら、取り組むことができるようにした。運営当日の終了後は、振り返りシートを用いて各科目からの視点において個人の振り返りをおこない、今後の学びにつなげられるようにした。こうした観点からも当日は、子どもとのかかわりや反応などから子ども理解を深めるための足がかりとなる、貴重な実践の場となったといえる。

Ⅳ 行事〔こどもの国〕取り組みの実際

取り組みの実際は、企画・準備・運営の段階を通しておこなわれるものであり、大きく以下の4期に分けられる。それらは、Ⅰ期〔計画〕、Ⅱ期〔準備・製作〕、Ⅲ期〔仕上げ〕、Ⅳ期〔当日の運営・振り返り〕である。

Ⅰ期の〔計画〕では、前半は主に実行委員会が中心となり、〔こどもの国〕全体像の共有、内容についての検討、コース別・クラス別の役割分担、製作物の試作品の作成などがおこなわれた。ここでの実行委員会での話し合いが、こどもの国全体の運営へ向けた基盤となる。特に、遊びの内容については、実行委員が案を持ち寄り、次の視点において検討・調整をおこなった。それは、対象年齢に応じた内容であるか、類似した遊びが重なった際の調整の有無、全体のバランス、安全性、スペース上の問題についてである。これらを検討・調整するにあたり、委員会内で共通理解が図りやすいよう、遊びのアイディアの記載と、製作物等に関しては、可能な限り試作品を持参することとした。音楽コンサートについても、内容、選曲、使用楽器、時間配分、全体のバランスにおいて内容が検討され、親子が鑑賞を楽しむことと、一部参加できるようなプログラム構成の配慮を心がけた。オペレッタは、学生が台本と音楽を構想し、担当者の助言のもとオリジナル作品を作り上げる準備を進めていった。計画期の後半には、これまでの検討・調整を経て枠組みされた内容が、学生全体へ周知され、コースやクラスの役割分担が示された。各コース・クラスによる役割分担と遊びの内容の詳細は、表1の通りである。

表1 コース・クラス別の役割分担と全体像

コース名 ／クラス	各広場の内容 ／名称	遊びや内容のタイトル	遊びや内容の詳細
音楽コース Aクラス	音楽広場/ うったお～よ	どれみふぁコンサート [プログラム]	
		Let it Go ～ありのままで～	器楽合奏による演奏。(アコーディオン, ベル, 打楽器, クラリネット, ベース, ピアノ)
		ポケットのうた	「ジャングルポケット」「ふしぎなポケッ ト」を小道具と振りを付けて歌う。
		クラリネットをこわしちゃっ た	トーンチャイムによる演奏。
		山の音楽家	ミュージックベルによる演奏。
		パンダ・うさぎ・コアラ	手遊び, 子どもたちと一緒に楽しみなが ら歌う。
		ミックスジュース	手遊び, 子どもたちと一緒に楽しみなが ら歌う。
		オペレッタ「オオカミと9 匹の子ヤギ」	グリム童話「オオカミと7匹の子ヤギ」 をもとに創作。台本・音楽は学生が構想 し, 音楽の一部に担当者橋本が作曲した 曲を挿入した ¹⁾ 。被り物(作り物の広場 の「どうぶつにへーんしん」を使用)・ 衣装・大道具・小道具を製作した。
手のひらを太陽に	子どもたちと一緒に振りを付けたり, 作 り物の広場で作った「マラカスガラガラ」 を鳴らしながら, 器楽伴奏で歌う。		
保育コース BCDE クラス	遊びの広場/ あそぼ～よ	たかくなあれ!	色画用紙で装飾した数種類の箱を積み上 げる遊び。
		たくさんたべてね	段ボールで作った大型の動物の箱の口に, 果物を入れ食べさせる遊び。
		わるいわに・へびをやっつ ける	モグラたたきゲームの様に, 手作りの囲 いと動物を作り, 叩く遊び。
		たからさがしアドベンチャー	新聞ボールプール上のスペースから宝を 探す遊び。
		オニたいじ・バイキンマン をやっつけろ	ボウリングゲーム形式で, オニのピンを 倒す遊び。
		そらしどシアター	手遊び, パネルシアターを上演するコー ナー。
教育コース Fクラス	作り物の広場/ つくろ～よ	わかゲット!	筒とボールを製作し, けん玉の要領で遊 ぶ玩具づくり。
		どうぶつにへーんしん	画用紙で動物のお面を製作し, 変身した り手作りの背景をバックに写真撮影を楽 しむコーナー。
		かみコップモグモグおぼけ	紙コップとビニール袋を用いて, 膨らま せるおもちゃの製作。
		マラカスガラガラ	ペットボトルと小豆を用いて, シールな どで装飾し, マラカスを製作。歌って踊 れるスペースもある。
		かみであそぼうコーナー	折り紙で, カエル・紙トンボ等の動くお もちゃを製作。

Ⅱ期の〔準備・製作〕では、Ⅰ期での計画を基に、コースやクラス単位で各クラスのこどもの国実行委員会を中心に、詳細な役割分担がなされた。主に担当する遊びの制作にかかる時期となる。遊びの広場や作り物の広場を担当する保育コース・教育コースは、遊びをおこなうための用具作りや、製作物の下準備などがおこなわれた。デザイン・強度・安全性などにも細心の注意を払い、1年次の学生なりに子どもの発達段階を意識しながら準備を進めた。パネルシアターを発表するグループは、シアターの作成、配役、練習などをおこなった。音楽コースは、音楽コンサート開催に向けた歌や器楽練習、創作オペレッタの配役・練習、大道具・小道具作りなどをおこなった。これらの準備には、当日の来場人数を予測する必要があるため、これまでの実績から親子100組と想定し準備を整えた。地域への広報は、地方紙への掲載と近隣の認定こども園・幼稚園、近郊の保育園へのポスター掲示、チラシ配布をおこなった。

Ⅲ期の〔仕上げ〕は、製作物の仕上がりや練習状況の最終確認の時期となる。遊びや作り物のコーナーでは、一つの教室において数種類の遊びが同時に行われるため、配置、仕切りの有無、高さ、見渡し、景観等にも配慮した環境の構成が確認された。また、会場設営はもちろんのこと、当日の来場者への誘導が安全かつスムーズになされるよう、案内表示や案内看板の作成・設置、プログラムなどの制作もおこなう。さらに、使用教室や遊びの内容に応じた学生の配置、動き、誘導等のタイムスケジュールの詳細も確認された。前日には、音楽コンサートとパネルシアターの、リハーサルを実施し、1年生全員が鑑賞した。運営当日は、学生が各担当の場所に配置するため、他コースの実際を見るのが現状難しい。したがって、〔こどもの国〕の取り組みの全体像を1年生全員が把握し、当日、責任をもって運営できるよう、リハーサルの時間を設定した。リハーサル終了後は、使用する全会場について、担当クラスによるチェックの後、実行委員会による点検がおこなわれた。点検の項目は、動線の確保、整理整頓、掃除、安全性等であり、気づいた点や修正箇所があれば、委員から各クラスへ修正を促した。

Ⅳ期の〔当日の運営〕では、開催前に学生全員が集合し、開会式を実施した。開会式では、実行委員からの最終確認、注意事項、クラス内の最終点検をおこなった。当日のこどもの国の来場者は、予想を上回る親子約300組となった。会場は、本学新2号棟の1階を遊びの広場とパネルシアターのスペース、2階を作り物の広場、4階を音楽広場のどれみふぁコンサート会場とした。それぞれに十分な広さを確保した中で行うことが可能となった。来場者の案内、誘導については、学内の複数の入口から会場までを学生が看板をもち、リレー式で案内する方法をとった。また、メイン会場となる新2号棟内での移動は、1階から2階、4階となるため、エレベーターの使用も可能となる。エレベーターの乗降口とエレベーター内には、学生が常時交代で配置されており、安全管理に最新の注意を払っていた。また、各フロアの遊びの広場の入り口にも学生を配置し、案内、誘導をスムーズにおこなった。

子どもとのかかわりの視点においては、各フロアの遊びの広場には学生が交代で担当し、子どもに遊びを伝え一緒に楽しむことや、子どもに声をかけるなど、常時子どもとのかかわりが見られた。子どもの姿から子どもの年齢を予測し尋ねてみることや、保護者の方と会話するな

どし、子どもの様子を観察しながらかかわる学生もいた。また、同じ遊びであっても、来場した子どもの年齢によって遊び方が明らかに異なることを気づき、声のかけ方、かかわり方を工夫するなどしていた。音楽コンサートでは、歌や楽器・オペレッタの演奏がおこなわれる中、一緒に歌ったり動いたりする子どもの姿を注視し、子どもの声や様子を受けとめながら進められた。また、オペレッタの上演中、登場人物に驚き泣き出す子どもがいたことなど、学生にとっては子どもの反応を目の当たりにする貴重な機会となった。全行程の終了後は、後片付けをおこない、使用した用具の解体、資源物等の仕分け、清掃、整理整頓などを実践した後、同日に振り返りと閉会式をおこない、当日の運営は終了した。

写真1 こどもの国 取り組みの様子



Ⅱ期：[準備・製作] 遊びの広場制作の様子



Ⅲ期：[仕上げ] 作り物の広場の会場設営の様子



Ⅳ期：[当日の運営] 会場への案内・誘導の様子



Ⅳ期：[当日の運営] どれみふぁコンサートの上演中の様子



Ⅳ期：[当日の運営] 遊びの広場の様子
(たからさがしアドベンチャー)



Ⅳ期：[当日の運営] 作り物の広場の様子
(マラカスガラガラ)

V 学生の振り返りと考察

振り返りの方法は、振り返りシートを用いた個人の記録にて実施した。振り返りシートの項目は、こどもの国の取り組み全般に触れる内容とし、さらには連携した科目からの視点で示している。項目は、以下の表2の通りである。これらの項目は、学生には事前に提示している。このことは先述したとおり、学生が行事と授業での学びのつながりを意識しながら取り組むことを重視したためである。振り返りでは、I期からIV期の過程を思いおこしつつ、最新の当日の子どもの姿やかかわりからの気づきを含めて、取り組み全体と授業での学びのつながりをより一層意識できるよう工夫した。

表2 振り返りシートの項目

こどもの国 企画・運営 振り返りシート	
①	子どもが遊ぶ(過ごす)環境構成の視点から、気づきや自分なりに意識したことを記入してください。[保育原理]
②	協働の視点から気づいたことを記入してください。[保育者論・保育内容人間関係]
③	子どもとのかかわりや子どもの姿(表情・言葉等含む)から、子どもの発達や子ども理解について気づいたことを、事例を挙げて記入してください。事例), 気づき) [保育原理・音楽表現・保育内容演習I]
④	こどもの国の企画・運営全般を通して学んだことや、保育者、教育者を目指すものとして今後役立てたいと思えることを記入してください。[基礎教育セミナーI]

※ [] カッコ内は、科目名を示す。

学生の振り返りには、次のような記載が見られた。項目①からは、子どもの安全配慮や遊びや発表の内容に応じた環境構成についての気づきが多く見られた。「年齢に応じた投げる距離設定でなく、能力や体の大きさに臨機応変にピンまでの距離を設定することを心がけた(教育コース)」これは、ボウリングゲーム(おにたいじ・バイキンマンをやっつけろ)のコーナーにおいて、事前に予測し環境構成をした距離と、実際に来た子どもの姿や遊び方が異なることを察知し、子どもに応じたかかわりをおこなうことが必要であることに気づき、配慮した結果を記載したものである。項目②からは、「うまく指示が伝達されないと効率よく作業は進まない。言葉のかけ方を考える必要がある。(教育コース)」「周りを見て、自分がどう動くか考えて行動する。(音楽コース)」など取り組み全体を振り返り、連絡体制の不十分さや、個人の行動への気づきについての記載もあった。項目③では、当日の運営での子どもが見せる姿からの気づきが記載された。「事例：オペレッタの時に、子どもがオオカミが怖くて泣き出した。／気づき：子どもは物語に入り込んで自分とヤギを同一化してオペレッタをみていることに気づきました。(音楽コース)」、「事例：マラカス作りの時の、ペットボトルの中にビーズやあずきを入れる姿やシールをはる姿など／気づき：子どもの年齢によって、片手でビーズをとる量や、入れるスピード、シールのはがし方、はり方などが異なる(保育コース)」など、前者は、音楽コンサートでのオペレッタの上演中の子どもの反応と気づきを記載している。後者は、作り物の広場でのマラカス製作(マラカスガラガラ)において、入れ替わり来場する多数の子どもと共にマラカスを作りながら、子どもとのかかわり、観察を通して個別の発達の違いに気づくことができたといえる。項目④のでは、「今回のこどもの国を通して、子どもが遊ぶ場所への

配慮や子どもに対しての接し方を学んだので、子どもの発達にあわせて遊びを考える必要があると思った（保育コース）」や、「チーム全員で協力して、子どもや保護者のためにどういったことができ、そのためには個々、集団がどういったことをすればよいかを常に考え、実行していけるようになりたい（教育コース）」などが記載された。これらのことから、学生は子ども一人ひとりに応じたかわり、配慮をすることが重要であることに実感を伴いながら気づくことができた。さらに、全員で物事に取り組むための意識、行動力、協力体制についての必要性を感じることもできたといえる。

VI お わ り に

これらの取り組みは、入学後間もない1年生が、同時期開講の授業における学びを基盤としながら、[こどもの国]の一連の流れを実践し、学びを総合的に結びつけていくことができた点で意義があるものといえる。入門期の学生が自分たちの力でできることを最大限に発揮することが可能となるような、枠組み作りを意識した。学生一人ひとりの意識への働きかけが、学生の今後の学びの積み上げとなり、保育者・教育者としての専門職を目指す過程で役立つものとなることを目指し、今後も検討を継続したい。

注

- 1) 橋本が作曲した曲については、オペレッタ「オオカミと9匹の子ヤギ」挿入曲、北翔大学短期大学部研究紀要第53号, pp105-112, 2015 参照。

(付記)

本稿は、全国保育士養成協議会第53回研究大会（2014年9月19日）における発表「保育者養成課程における行事の企画・運営力向上に向けた取り組み」（清水桂子・高橋さおり）をさらに検討・修正したものである。